

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第27号（令和2年2月）

あゆむ「今日はお寺だって？」

ミドリ「そうよ、浄光寺。」

あゆむ「お寺と言えば、仏様だな。」

ふみお「そう。浄光寺には、2つの市の指定文化財の仏様があるらしい。」

ミドリ「2つもあるの？ なにか歴史のあるお寺なのね。」

あゆむ「門の前にいろいろなものが立っている。これでわかるかな。」



ふみお「説明板に、“上山城主藤井松平家菩提寺”とある。殿様のお墓があるんだな。そして、“浄土宗 湯出山 浄光寺”。それから、“上山温泉開湯月秀上人をまつる寺”。それに、“つつじと睡蓮の庭園”とある。」

ミドリ「あ、思い出したわ。前に、鶴脛温泉のことで、月秀というお坊さんが温泉を発見したという話だったわね。」

ふみお「うん。左の石柱標には、“上山温泉開基長祿院湯出山 浄光寺”と書いてある。長祿は温泉発見のころと言われる年号からとったんだろね。」

あゆむ「説明板の前に、大きな石の“がまがえる”がいるぞ。どういうことかな？」

文じい「ふむ。昔から庭園の池には“がま”がたくさん

じょうこうじ あみ だ によらいりゅうぞう

浄光寺阿弥陀如来立像

まつだいらけはいしょ あみ だ によらいりゅうぞう

松平家牌所阿弥陀如来立像

ん住むので有名じゃ。」

ミドリ「なんだかすごい寺なのね。」

あゆむ「よし、とにかく入ってみよう。」

ミドリ「山門をくぐると、左に墓が建っているわ。“開祖良界月秀上人”。」

ふみお「上人は和尚と同じお坊さんのことだよ。文化9年のお墓だ。」



ミドリ「そして、右には“陛下 御膳水”とある。」

文じい「陛下とは、明治天皇のことじゃ。東北をずっと巡られた時にとてもよい水ということでお上げたという。」

ミドリ「本当にいろんなつながりのある寺なのね。そして、いよいよ本堂ね。」

あゆむ「おお、中もすごいな！」

ミドリ「本当に周り天井までいろんな置物や飾りのようなものでいっぱい！」

文じい「そうじゃが、まず、御本尊様にお参りじゃ。南無阿弥陀仏……。」

あゆむ「ところで、この御本尊様は、確か、月秀和尚が住んだと言われる法界寺にあったもので、お城の方に光を放ち、それで、城に

うつ
移された。ところが、光はさら
らに白禿山のふもとの方を
指すようになった。そこで、
そこに寺を建立し、御本尊を
移し「城光寺」と名付けた。

ただ、城光では差しさわり
があるとのことから、後に
浄光と改められたというこ
とだったよね。」

あゆむ「それおもしろい話だった。
思い出した。」

ミドリ「神々しくて、心が洗われる

ような仏様だわ。ずうっと拝んでいたい。」

文じい「阿弥陀如来様じゃ。像高は 74 cm。桧の寄木
造りで、漆箔と言って、漆の上に金箔がほ
どこされていたようじゃ。今はひだの部分
にわずかに残っている感じじゃ。鎌倉時代
から室町時代初期頃までのものと言われ
ておる。」

ミドリ「寄木造りというのは？」

文じい「仏像づくりのはじめは、一木造りといって、
一本の木を彫ってつくっていた。やがて、
木を割って分けて中を彫ってまた合わせ
る割刳造り。そして、部分ごとにつくったも
のを寄せ合わせる寄木造りへと発展した。」

ミドリ「御本尊様は黒っぽいわね。」

文じい「黒仏とも言われてきたが、長年の煙などの
影響かの。」

ふみお「寄木造りだと、多くの注文にも応じられて、
重さも軽くできそうだね。」

あゆむ「それで、もう一つの仏様は？」

文じい「ふむ、左にある松平家の位牌所の中央に
ご安置されておる。像高は 80 cm。」

ミドリ「うわあ、ご位牌だけでなく、刀とか写真な
どがたくさんある！」

あゆむ「仏様はきれいに金色に輝いているぞ。」

文じい「これも阿弥陀如来立像じゃが、松平家 2 代
信一侯が徳川家康に随って、織田信長を
援助するように言われ箕作城を攻めて



浄光寺阿弥陀如来立像（本尊）



松平家牌所阿弥陀如来立像

たたか
戦った。その時の戦利品として持ち帰った
ものだという。御本尊様と同じように漆箔
であったが、黒くくすんでいたものを、この
たび元のような金箔に修復された。」

ふみお「目は、水晶でつくった玉眼といわれるもの
だよな。」

文じい「そう、これがあると、よく鎌倉時代の運慶
という仏師の流れだと言われる。」

ミドリ「その他の特徴は？」

文じい「頭が盛り上がった肉髻で、頭髪はパンチパ
ーマのような螺髪。額に白い巻き毛が納
められている白毫。また、後ろに輝くもの
を背負っているようなものは、仏様の後光
を表す光背と言うものじゃ。御本尊様は舟
形飛天光背、牌所の仏様は、二重円光背。」

あゆむ「それから、手や指の組み方の意味は？」

文じい「仏様の徳や誓いを示す印相というものじ
ゃが、阿弥陀如来は九品印。さらに、立像は
上品下生が特徴。親指と人差し指を合わせ
る上品。右手を上げ左手を下げる下生印、
つまり、来迎印。阿弥陀如来を念ずる者は、
極楽浄土に受け入れられる。来迎とは、そ
こからお迎えが来ることを表している。」

ミドリ「ますますありがたくなるわ！」

文じい「欄間には、びっしりと干体仏。墓地には、た
くさんの大事な方の墓もある。また次の機
会にお参りさせてもらおうとしよう。」